

通学距離に関する参考資料

1. 文部科学省の「中央教育審議会」「初等中等教育分科会」
 (1) 「小・中学校の設置・運営の在り方等に関する作業部会 (第2回)」

【開催日時：平成20年7月15日 (火曜日)】

- 配布資料3 『通学制限に係わる児童生徒の心身の負担に関する調査研究 東京学芸大学朝倉隆司』(抜粋)

文部科学省新教育システム開発プログラム事業

通学制限に係わる児童生徒の心身の負担に関する調査研究

東京学芸大学 朝倉隆司

通学34

小学5年のまとめ

- 通学制限(4km)をこえる児童が少なく、長距離、長時間の通学の影響について、決定的なデータとは言えない。そもそも、児童生徒は日常の生活において多くは適応しているため、通学の影響はマイルドなものであり、検出ばなかなか困難である。
この制約をふまえて、次のように考察する。

通学01

目的

- 通学の距離・時間・方法や交通環境などの通学条件と児童生徒の心身の健康・ストレスとの関連性を明らかにすること
- 児童生徒の心身状態の評価にあたり、自覚的評価と客観的(生理学的)指標の両面から検討する。

通学35

- 徒歩通学の児童においては、4kmまでは特に顕著な問題はみられない。
「4km~5km」の児童は、クロモグラミンAのピーク(通20)、ポジティブな感情得点の低下(通31)などを見ると、心理的ストレスがかかっている可能性があることが推察される。

- (2) 「小・中学校の設置・運営の在り方等に関する作業部会 (第12回)」

【開催日時：平成21年3月27日 (月曜日)】

○議事録(抜粋)

<通学距離と通学時間>

- 現在の規定では、通学距離については小学校でおおむね4キロメートル以内、中学校でおおむね6キロメートル以内であることが適正とされている。(義務教育諸学校の施設費の国庫負担等に関する法律施行令)
- 小学校5年生と中学校2年生を対象に、通学距離とストレスとの関係を調べた研究(第2回作業部会東京学芸大学朝倉教授説明資料)によると、小学校で4キロメートル以内、中学校で6キロメートル以内という通学距離は、気象等に関する考慮要素が比較的少ない場合、その距離の範囲内であれば距離によりストレスが大幅に増加するということは認められないことから、児童生徒の心身に与える影響という観点からは、現在においても、その負担が明らかに大きいたとは考えられないか。

2. 保健医療科学院「平成4年度厚生省心身障害研究 生活環境が子供の健康におよぼす影響に関する研究 通学時間・手段が子どもの健康に及ぼす影響について 近藤洋子、高田谷久美子、日暮眞」(抜粋)

2) 通学時間・手段の健康への影響

① 徒歩通学(学区制公立学校の場合)

達坂⁵⁾は、神奈川県内郡部A小 613人、都市部B小818人合計1,431人を対象にアレルギ一性疾患の有無および生活環境についてを調査し、学童のライフスタイルと健康状態との関連について検討を行っている。まず、郡部に位置するA小において、通学時間の平均値(16分)±1SD(9分)以内・それ以上・以下の3群に分けた場合、通学時間の増加に伴い、有症率の減少が認められた(図6)。

これらの3群について、生活習慣を比較すると、通学時間が長いほど、偏食有、朝食の欠食、テレビゲーム所有の各率が減少することから、歩行運動習慣因子である通学時間の長い群においてはより健康的なライフスタイルであることが推察できる(図7)。郡部A小の場合は、98.5%が木

造住宅に居住しているため、アレルギ一症状発現の一要因である居住環境の影響を除外できるものと考えられる。一方、気密性の高い鉄筋・鉄骨住宅居住の割合が68.7%と高い都市部B小について同様の解析を行った結果、通学時間とアレルギ一症状有症率との間にはA小のようなクリアな関係はみられず、アレルギ一症状を健康指標とする場合は、居住環境の関与が大きい事が示唆されている。

仲家⁷⁾は、児童の脚機能を検討するために、通学距離が4km以上の群と1km以下の群を比較したところ、脚部の筋持久力において前者が有意に優れており、日常の歩行時間(距離)の違いが影響していると述べている。

3. 厚岸町教育委員会 平成24年度 調査研究事業報告書「子どもの生きる力と体力の向上の移管する調査研究」(抜粋)

○4. 考察

「体力・運動能力」全般では、有意差のある変容が見られた。また、細目の6項目中、5項目について向上が見られた。「上体起こし」「反復横とび」については、有意差のある変容であった。

このことは、1週間にわたる片道2.7kmの徒歩通学や自由時間におけるネイパルの体育館での運動などによって、筋力や柔軟性、敏捷性の向上に効果があったものと推察する。

昨年度と比較すると、向上の度合いがやや低かった。これは、昨年度は大研修室「おおぐま」に、新体力測定用の器具を常設し、子どもたちは自由時間を使って自主的に当該種目のトレーニングを行っていたが、今年度は昨年度のように調査器具を常設していなかったことから、昨年度のような伸びがみられなかったものと考えられる。

これらの結果から、徒歩通学による、体力の向上は2年間の調査を通じて実証されたということができる。